

第VI章 長崎県の縄文晩期から弥生時代前期の土器の様相

はじめに

長崎県内で調査にあたっていると、他県にくらべて、遺構の中からまとまった量の土器を出土する遺跡がきわめて少ないと感じる。過去の調査で、よい資料が出土しても未報告であったり、報告書が写真集であったりと不備なところもある。したがって、土器の研究がなかなか進まないのが現状である。長崎県の縄文晩期から弥生前期の土器は一体どのような様相をみせるのだろうか（註1）。このような関心から、今回、小稿で概観することにした。長崎県の地域性を少しでも抽出できればとの思いである。もちろん、県内すべての土器を見たわけではないし、九州北部の土器を広く実見したわけでもない。さらに、本稿は土器の型式や編年を考察するものでもない。九州島がすっぽり入るくらいの県域をもつ本県の土器を広域的に概観しようとするものである。多分に観念的であり、土器型式の認定などで事実誤認や誤解があると思われる。そのような点は、再度検討して修正し、将来に備えたいと思う。

1. 山の寺式土器と原山式土器をめぐって

（1）長崎県の縄文晩期前葉の土器について

長崎県で縄文晩期前葉の土器の実態が比較的わかっているのは島原半島である。筆者は島原半島の晩期前葉の土器の変遷を有明町中田遺跡出土土器→島原市畑中遺跡出土土器と考えている（古門1995）。大略、中田遺跡出土土器は肥後地方の天城式に、畑中遺跡出土土器は肥後地方の古閑式に対応している。島原半島以外の地域では、縄文晩期前葉の土器の様子はあまりわかっていない。そもそも、この時期の遺跡が島原半島に集中していて、長崎県の他の地域には希薄であることが原因である（註2）。このような状況は、今後あまり変化しないと考えられるため、これからも島原半島を中心に土器の集成や検討が行われなければならないであろう。

（2）長崎県の縄文晩期中葉および後葉の土器

縄文晩期土器の型式名のうち、島原半島の地名が冠されたものに、晩期中葉の礫石原式土器、晩期終末（弥生早期）の山の寺式土器、原山式土器などがある。礫石原式土器は島原市礫石原遺跡、山の寺式土器は深江町山の寺梶木遺跡、原山式土器は北有馬町原山支石墓群出土の土器を指標としている。礫石原式遺跡は鹿児島県黒川洞穴の土器をもって認定された黒川式土器の、さらに単純な出土様相をもつ遺跡を探索するなかで調査がおこなわれたものである。設定された礫石原式土器の型式名は、黒川式土器という名称にとってかわることはできなかったが、島原半島の当該期の型式名として、今でも有効であろうと考える。

また、長崎県北部の晩期中葉の土器型式として、佐世保市宮の本遺跡出土土器を指標とした宮の本式が山崎純男・島津義昭両氏によって設定されている（山崎・島津1981）。大略、黒川式・礫石原式併行期の土器と考えてよいのであろう。宮の本式は福江市白浜遺跡でも確認されるため（弥生土器研究会1984）、五島灘沿岸地域に一定の分布範囲をもつといえる。

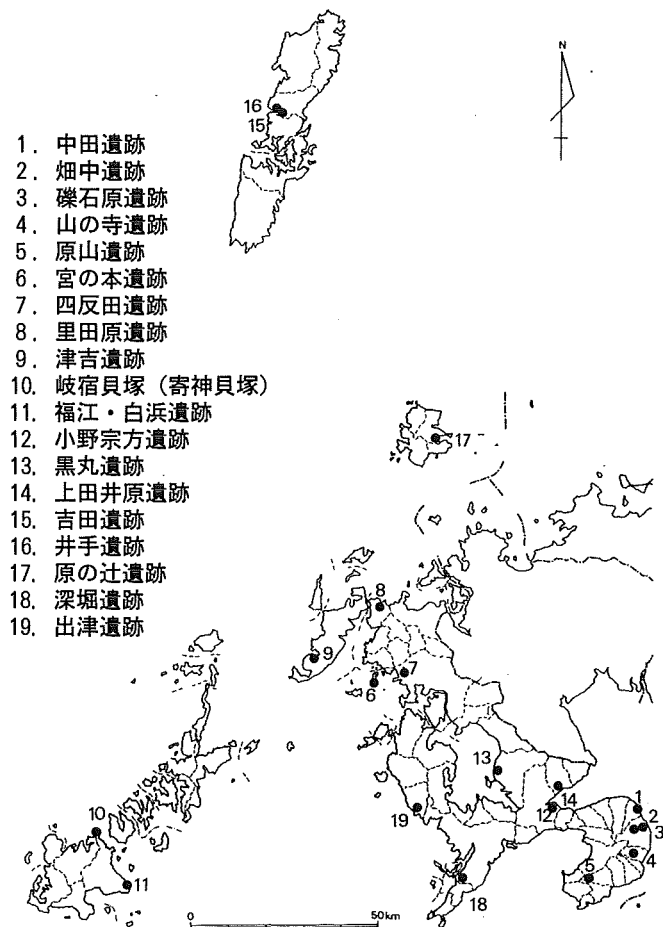
一方、山の寺式という型式名は、現在もなお九州の縄文晩期終末の土器型式名として、広く定着していながら、その意味する内容は研究者によって異なっている。学史的には、一度消えて、復活するといった運命をたどった型式名でもある。したがって、山の寺式という型式名を使用する際には、使用者自らが山の寺式土器の編年観を提示してからでないと使えないという、きわめてやっかいな型式名となっている。これに対して原山式という型式名は、いまや学史のなかにしかみいだせない型式名といってもよい。県内の関係者でも、原山式という型式名を積極的に使用する者は少ないだろう。はたして原山式土器の名は島原半島でも消えてしまう運命なのであろうか。

(3) そもそも山の寺式土器とは

山の寺式土器は、長崎県南高来郡深江町梶木山の寺に所在する山の寺遺跡出

土土器を指標とする土器型式であると書けば、かなり教科書的な文章となる。山の寺遺跡の代表的調査としては、1957年（昭和32）6月（1次調査）、8月（2次調査）の古田正隆、森貞次郎がおこなったA～F地点の調査（註3）と、1960年（昭和35）8月と1961年8月に、日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会が調査したA地点、B地点、C地点の調査がある。前者は1973年に古田によって報告されたが、後者は、概報こそでているものの、本報告はなされておらず、とくに山の寺式土器を主体としたといわれるB地点出土の土器の実態が未だ不明で、このことが「山の寺式土器」をめぐる混乱の最大の要因といえる。現在公表されている山の寺式土器の実測図について、中島直幸は「山ノ寺遺跡では黒川式から夜臼式までの混在した包含層のあるA地点と、山ノ寺式土器のみを純粹に出土したB地点とが調査され、古田らの表採資料も有名である。現在、実測図として公表されている資料は、A地点と表採遺物の一部分であるために、多くの人々に誤解をあたえている」と指摘した（中島1982）。

『九州考古学』10に掲載された山の寺遺跡の概報を見る限り、A地点の土器は従来、黒川式とか礫石原式と呼称された晚期中葉の土器が中心で、これに対し、B地点出土土器は刻目突帯文土器を主体としていたことがわかる。山の寺式土器といった場合に、当初、森・乙益は「山ノ寺B地点の土器」をもって山の寺式としたが、その後、森は山の寺A地点の土器をもって山の寺式土器としようとした



第9図 関連遺跡位置図

(森1982)。ただ、森の提唱は、山の寺遺跡調査以降に、北部九州で進んだ当該期の土器編年を考慮するなかで、刻目突帯文土器を夜臼式土器の範疇で整理しようとした動きの中で生じたものである。

(4) 山の寺遺跡B地点の土器とはどのような土器なのか

それでは、山の寺遺跡B地点の土器とはどのような土器なのであろうか。山の寺遺跡B地点出土の土器は、現在、国学院大学に保管されている。当該期の土器編年をおこなった研究者はすべからず、国学院大学の資料を実見している(註4)。

筆者は、山の寺遺跡B地点の土器を実見したわけではないので、これ以上の検討はできないが、研究者によって同じ土器をみながら、編年の位置付けや、時間的な前後関係が異なるのはよくあることである。山の寺遺跡の刻目突帯文土器については、A地点出土のものも、B地点出土のものも変わらないという研究者もいる。要は山の寺遺跡B地点の資料が一日も早く公開され、その上で議論されることが必要であろう(註5)。

現在、島原半島から周辺地域で山の寺式土器段階の刻目突帯文土器とみなされている資料は大村市黒丸遺跡出土土器(稲富1980)および小浜町朝日山遺跡出土土器(藤田・安楽1981)である。いずれも突帯部の刻目が指頭による刺突や棒状工具による刺突でおこなわれており、従来言われているような粗野な刻目突帯文を特徴としている。

(5) そもそも原山式土器とは

原山式土器の型式的内容は乙益重隆が夜臼式土器の説明のなかで、「長崎県南高来郡北有馬町原山出土の原山式土器は、広義の夜臼式と解すべきであろう」としたものがよく知られている(乙益1965)。

森貞次郎は、より具体的に原山支石墓出土土器と夜臼式の比較をおこなっている。それによると「いま刻目突帯文土器の刻み目や条痕文の手法が粗大で古式とみられるものを夜臼Ⅰ式とし、弥生式土器に伴うものをⅢとし、弥生式土器を伴わないもので、弥生式土器より以前のものか、または弥生式土器と併存する時期とみられるものをⅡとして夜臼式を3分類された上で原山支石墓の「A地点支石墓群は夜臼Ⅰ、C地点支石墓群の第3支石墓も夜臼Ⅰ、第1支石墓は夜臼ⅠまたはⅡ、D地点支石墓群は夜臼Ⅱ－Ⅲ、C地点西方の土器群は夜臼Ⅲとみられるとされた(森1982)。

実測図が公表されているのは、夜臼Ⅱ－ⅢとされたD地点(D群)支石墓出土土器と、弥生土器と共伴したC地点西方の土器群である。

しかし森によって公表された内容だけで、原山式土器の全容とするには資料が少なすぎる。このことが、本県でも原山式土器が島原半島の夜臼式併行期の土器という漠然とした認識しかもたれていない現状に現れている。

(6) 山の寺式土器(山の寺B地点出土土器)・原山式土器と夜臼式土器・板付式土器の併行関係

次に、山の寺式土器と原山式土器は北部九州編年ではどのような編年的位置付けがなされているかみてみよう。板付遺跡の夜臼単純層より下層から出土する刻目突帯文土器を山崎は「夜臼Ⅰ式」とよび、「山の寺式土器に丹塗り磨研の壺形土器が伴うことを考えれば、山の寺式土器は夜臼Ⅰ式、Ⅱa式に平行する土器」で、「後続する原山式土器は板付Ⅰ式あるいはⅡa式に平行する可能性が強いと

考えている」とした（山崎1978）。山崎は山の寺式や原山式を島原半島という局所的な地域色の強い土器として理解しようとする。森貞次郎も同様な考え方をとった。そのことが、先述したように、山の寺遺跡A地点の土器（黒川・礫石原式土器が主体）を山ノ寺式とし、山の寺遺跡B地点出土の土器を夜臼式の型式名で整理しようという方向にあらわれる。

一方、中島直幸は、菜畑9-12層の土器を「山の寺式」とよんだ。そして「菜畑9-12層の土器をもって『山の寺式』土器の再構成をおこない、夜臼式単純よりも一層古い突帯文甕、あるいは壺の初源期の土器型式として設定し直」したのである（中島1982）。さらに「原山式は夜臼単純→夜臼式に相当する」（中島・田島1982）とし、「何故に山ノ寺式＝夜臼式並行、原山式＝板付式並行（後略）」となるのか「理由が不明確である」とした。すなわち、山の寺式土器は玄界灘沿岸にも見いだせるのであって、山の寺式を島原半島の地域色の強い土器とみて、夜臼Ⅰ式と併行させる山崎・森とは異なる見解を示したのである。

田崎博之も「山の寺式」を設定しているが、「山ノ寺式と言っても、長崎県山ノ寺遺跡B地点出土土器を指標とする『山ノ寺式』とは異なる。この『山ノ寺遺跡B地点式』ともいうべき土器群は、夜臼式と時間的に併行するものである」として（田崎2000）、従来の「山の寺式」については山崎・森と同じ立場にたつ。ただ、田崎の設定した「山の寺式」土器は型式学的手法に加えて、遺構からみた一括性や共時性を重視して導き出されたものであって、「山の寺遺跡B地点出土土器」とは異なり、層位を重視した中島の「山の寺式」とも異なるということである。

一方、原山遺跡の土器については、橋口達也が検討をおこなっている。橋口は原山遺跡の土器が「玄界灘沿岸のものと共通しており、时期的にもたいした遅れはないものと考え」とし、「原山遺跡の下限が板付Ⅱa式併行期まで下がるとは考えられない。」として、山崎の見解とは異なる考えを示した（橋口1985）。

先述したように、小稿は様式としての「山の寺式」に関わる、山崎・橋口・中島らの論争を検証するのが目的ではないので、これ以上の記述はおこなわない（註6）。地元の担当者としては、島原半島の山の寺式土器とは、あくまでも「山の寺遺跡B地点出土」の土器であって、この土器の検討から始めなくてはならないと考える。したがって今後、島原半島では「山の寺式」という型式名をいったん棚上げして、「山の寺遺跡B地点出土土器」ないし、田崎博之が論文中で使用した「山の寺遺跡B地点式土器」（田崎2000）として、土器そのものの検討から始めることが大切ではないかと思っている。

また、原山式土器については、ある程度の時間幅を有すると考えられる。標式となる原山遺跡出土土器も、先述のとおり森の唱える夜臼Ⅰ～Ⅲが混在しており、橋口も曲り田（古）式から夜臼式までを含むとみている（橋口1985）。まとまった資料が出土するまでは具体的な検討ができないかもしれない。後述するが、島原半島を含めた有明海沿岸地域では、弥生時代前期を通じて刻目突帯文土器が甕形土器の主体を占めることがわかっている。諫早市・大村市も同様である。板付Ⅰ式土器や板付Ⅰ式土器類似の土器は、島原半島・諫早・大村地域には存在しない。この地域で板付式土器が把握でき

るのは板付Ⅱ式土器段階からである。しかも出土量は少ない。島原半島で「原山式」という型式名を使うにあたっては、山の寺遺跡B地点出土土器のような、古相の刻目突帯文土器と、亀ノ甲タイプの甕のような、刻目突帯文土器の系譜をひく弥生土器を除いた残りの刻目突帯文土器に限り、「原山式」土器と呼称するしかないであろう。しかし前述のように原山式土器という型式名称にはさまざまな問題がある。やはり島原半島では、いったん「原山式」という型式名称を保留し、「原山支石墓D地点出土土器」と限定的に呼び換えたほうがよいと考える（註7）。

2. 長崎県の弥生前期土器

（1）長崎県の弥生前期土器研究

長崎県は、県域の中に九州島が収まるほどの広さをもつ県である。したがって、土器の変化も地域によってかなり異なる。地域的な変異がありながら、資料が少ないという二重の制約から、なかなか全体象が把握できないというのが現状である（註8）。

佐世保市教委の久村貞男は、佐世保市四反田遺跡の報告において「弥生前期前半の板付Ⅰ式は玄界灘沿岸に分布する土器であり、周辺部においては、依然として晩期終末期の土器文化を主流とし、当該地域においても同様で、板付Ⅰ式に相当する時期は突帯文土器の山の寺・夜臼期である」と記した。さらに久村は福岡平野などにみられる板付Ⅰ式土器と夜臼式土器の共伴現象が、県北地域では板付Ⅱa式と夜臼式土器との間で生じていると報告している（久村1994）。このように久村の指摘は長崎県域の板付系土器の出現について大変示唆的なものである。

しかし久村がいうように、県北地域には板付Ⅰ式土器はないとしても、本県の他の地域には招来されている可能性がある。本県の古手の板付系土器が、板付Ⅰ式なのかⅡa式なのかという問題も解決しなければならない問題である（註9）。

（2）長崎県の弥生前期土器の概観（註10）

標題に示したような概観を行う前に、当該期の区分をここでは下記のように設定したい。すなわち板付Ⅰ式と板付Ⅱa式併行期を長崎県の前期第Ⅰ期とし、板付Ⅱb式と板付Ⅱc式併行期を前期Ⅱ期とする。前期Ⅰ期の土器には、刻目突帯文系甕、板付系甕、両者の折衷系甕が存在する（註11）。前期Ⅱ期には板付系甕と刻目突帯文系甕から成立した亀ノ甲タイプの甕がある（註12）。第10図の里田原遺跡出土の甕形土器で示すと、板付系甕（A・D）、折衷系甕（B）、亀ノ甲タイプの甕（C）である。

前期Ⅰ期は五島地域、県北地域でまとまった資料がみいだせる。五島地域で前期Ⅰ期の土器を出土した遺跡は、宇久町宇久松原遺跡、小値賀町殿寺（とべら）遺跡、同笛吹（ふえふき）遺跡、若松町滝河原（たきがわら）遺跡、岐宿町岐宿（きしく）（寄神）貝塚、福江市白浜貝塚などである。このうち宇久松原、殿寺、笛吹、滝河原の各遺跡は埋葬遺跡であるため、資料にかたよりがみられ、今回は、日常土器を出土した岐宿貝塚、白浜貝塚をとりあげる。しかし白浜貝塚の報告は写真集のため、報告としては不十分で、岐宿貝塚の報告は昭和30年代の報告のため、現在の検討には耐えられない。ところが、幸いなことに両遺跡の土器は、1984年（昭和59）に弥生土器研究会の手で公表されている

(弥生土器研究会1984)。白浜貝塚の資料は製図こそされていないが、精緻な実測図によって土器の内容は十分に把握できる。

白浜貝塚の前期Ⅰ期の土器には、刻目突帯文系甕と板付系甕が存在する。刻目突帯文系甕と板付系甕の比率はよくわからない。Ⅱ期になると、板付系甕に折衷系甕が加わる。亀ノ甲タイプの甕も存在するが少なく、客体でしかない。

岐宿貝塚では、刻目突帯文系甕はみられない。板付系甕、折衷系甕、亀ノ甲タイプの甕がある。したがって岐宿貝塚の土器は前期Ⅱ期が主体とみられる。弥生土器研究会の資料では代表的な土器を抽出して掲載しているため、比率はよくわからない。

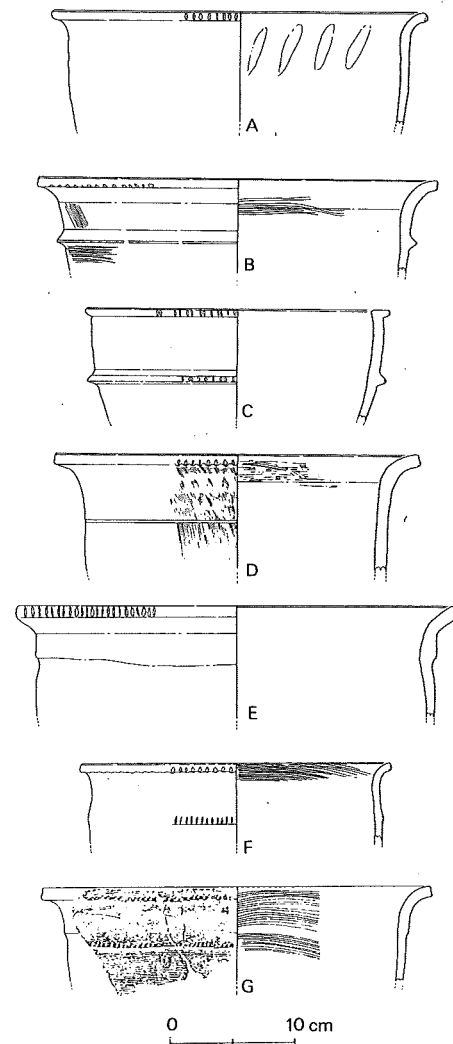
このように、五島地域では前期Ⅰ期の段階で板付系甕が出現するが、主体は刻目突帯文系甕である。Ⅱ期にも引き続き板付系甕が使用される。Ⅱ期には亀ノ甲タイプの甕も出現するものの、客体にすぎないことがわかる。

県北地域で板付系土器を出土する遺跡は、佐世保市四反田（したんだ）遺跡、田平町里田原（さとたばる）遺跡、平戸市津吉（つよし）遺跡などである。

四反田遺跡の前期Ⅰ期の資料としては、刻目突帯文系甕と板付Ⅱa式甕が組み合った小児甕棺、板付Ⅱa式土器を用いた甕棺が存在する。次のⅡ期は、板付系甕、折衷系甕、亀ノ甲タイプの甕からなる。亀ノ甲タイプの甕が全体に占める割合は比率は低く、7%と報告されている（久村1994）。

里田原遺跡では1988年（平成元）から1990年にかけての調査で、当該期の良好な資料が出土している（安楽1992）。弥生土器の主体は前期Ⅱ期である。板付系甕、折衷系甕、亀ノ甲タイプの甕がある。甕の型式は甕F・甕Gを除くと、佐世保市四反田遺跡の甕と共通している。四反田と同じように亀ノ甲タイプの甕はきわめて少ない。なお下層より出土している刻目突帯文系甕は、縄文土器として報告されているが、先行する前期Ⅰ期の土器群である可能性が高い（註13）。

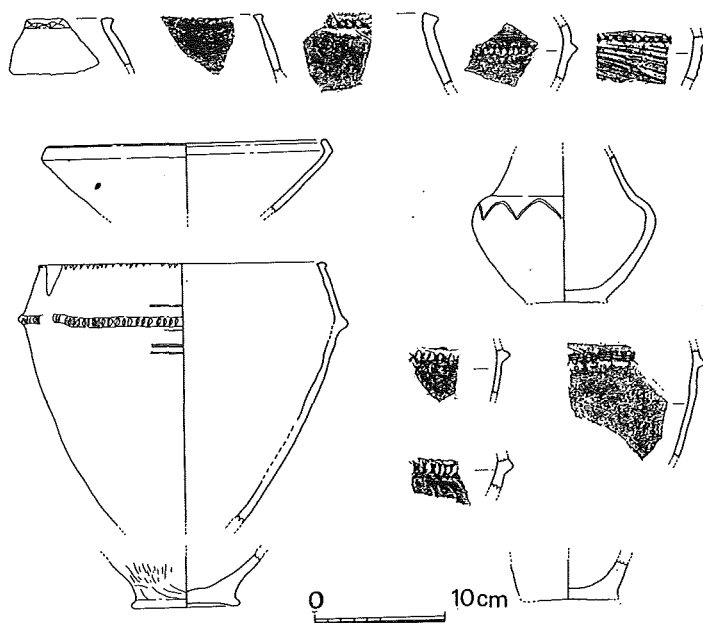
このように、五島地域や県北地域の前期Ⅰ期



第10図 里田原遺跡出土の甕形土器（S=1/6）

では、板付系甕の存在は希薄で、主体は刻目突帯文系甕である。Ⅱ期になると逆に板付系甕が主体となっており、亀ノ甲タイプの甕は少ないことがわかる。

次に県央・島原地域であるが、前期Ⅰ期の様相をよく示す遺跡が、北高来郡高来町の上田井原（かみたいばる）遺跡である（高野1993）。試掘坑からの出土であるが、出土層位も限定されており、一括資料と考えられる。出土した板付系壺は板付Ⅱa式に併行段階のものとみられる資料で、刻目突帯文系甕を伴う。



第11図 北高来郡上田井原遺跡第14試掘坑出土土器（S=1/6）

調査者はこの甕を「亀ノ甲タイプの甕」と報告しているが、亀ノ甲タイプと呼ぶならば古い型式となるだろう。ここでは刻目突帯文系甕としておく。甕の型式名称はさておき、この地域の前期Ⅰ期は、このように刻目突帯文系甕と、板付系壺とがセットになっていることがわかるのである。

諫早市小野宗方（おのむなかた）遺跡では、包含層から前期Ⅱ期の土器がまとまって出土しており、この地域の前期Ⅱ期の土器の様相をよく示している（川瀬1994）。出土した土器は亀ノ甲タイプの甕であるが、口縁部の突帯が小さなものが含まれており、このタイプの甕でも古手のものであろう。共伴する壺は板付系のものである。この地域ではⅡ期になっても刻目突帯文系の弥生土器である亀ノ甲タイプの甕が主体で、それに板付系壺が伴い、板付系甕は客体であることがわかる。

大村市黒丸（くろまる）遺跡では、平成6年度に調査されたⅢ－7区の第1号土坑より、亀ノ甲タイプの甕2点と城ノ越式段階に多くみられる壺が出土している（町田1996）。この地域の前期Ⅱ期の末期の土器様相といえよう（註14）。

3. まとめ

長崎県の弥生前期の甕形土器には、刻目突帯文系甕、板付系甕、折衷系甕、亀ノ甲タイプの甕が存在する。弥生前期をⅠ期（板付Ⅰ式・Ⅱa式段階）、Ⅱ期（板付Ⅱb式・Ⅱc式段階）に分けると、それぞれの時期と地域で、主体となる甕の型式が異なっている。

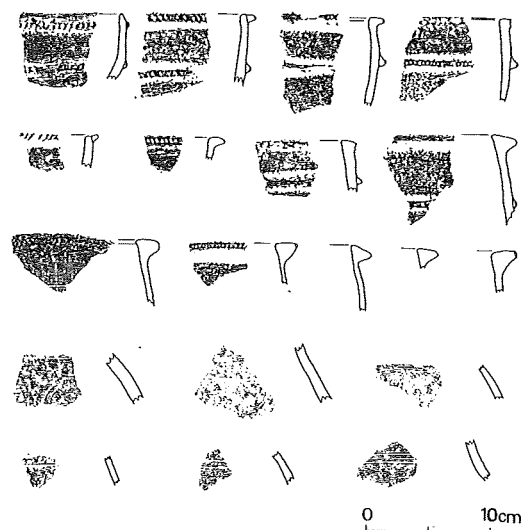
五島地域のⅠ期は板付系甕は存在するものの、主体は刻目突帯文系甕である。Ⅱ期になると、板付系甕が主体となる。折衷系甕や亀ノ甲タイプの甕も存在するが、亀ノ甲タイプの甕は客体でしかない。この五島地域とよく似た状況をみせるのが県北地域である。Ⅰ期は刻目突帯文系甕が主体を占めるものの、Ⅱ期では板付系甕が主体をしめるようになる。亀ノ甲タイプの甕も存在するがその量は少ない。

I期における板付系甕の出土は五島地域のほうに一定量の土器が出土しているようである。宮崎貴夫は島嶼部のほうに、本土部より早く新たな型式の土器が一定量出土する原因として、島嶼部では地元での土器生産が行われず、島外からの搬入によってまかなっていたからではないかと推論しているが、傾聴に値する。

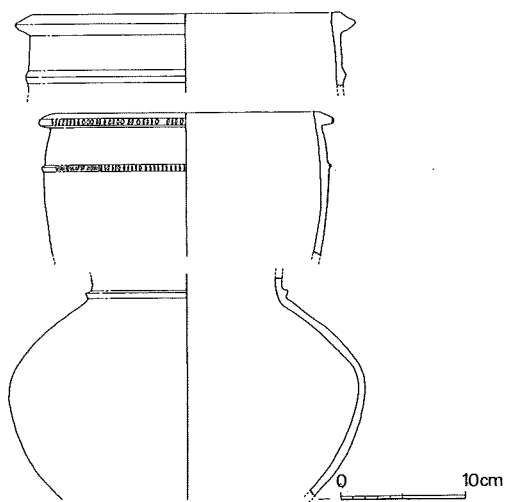
次に、県央・島原地区では、I期の主体が、五島地域や県北地域と同じく刻目突帯文系甕であるが、両地域に比較すると板付系甕の存在はきわめて希薄である。II期になっても板付系甕が主体となることはなく、亀ノ甲タイプの甕が主体となり、ここで五島・県北地域とは決定的に異なった様相をみせるのである。

したがって、長崎県の前期弥生土器の状況は、前期I期（板付I式・IIa式段階）では、刻目突帯文系甕が主体を占め、II期には五島・県北地域で板付系甕が主体を占めるものの、県央・島原地域では刻目突帯文系甕から成立した亀ノ甲タイプの甕が主体を占めるとまとめることができる。

なお、長崎県の弥生土器については、弥生後期から古墳時代初頭にかけての島原タイプの土器（宮崎1997）についての問題があるが、機会をあらためてとりあげることにはしたい。



第12図 小野宗方遺跡出土土器 (S=1/6)



第13図 黒丸遺跡 III-7区第1号坑出土土器 (S=1/6)

【註】

註1 平成8年6月に長崎県考古学会の総会が大村市で開催され、「弥生文化成立期における地域的諸相について」というテーマで研究会が開かれた。研究会には、佐賀県の中島直幸氏、福岡県の吉留秀敏氏、熊本県の清田純一氏、長崎県佐世保市の久村貞男氏、長崎県大村市の太野安生氏が発表された。中島・吉留両氏の考えはその時、既に活字となって発表されていたが、清田氏もその後『肥後考古』誌上に発表された（清田1998）。久村氏の発表内容は既に報告書に掲載されている。太野氏は大村市黒丸遺跡沖田地区出土土器を検討され発表されたが、その結果は近く論攷として公表される予定である。

またこの時、事務局が作成した資料のなかに、「島原半島における縄文後期後半～晩期の様相」と題した一覧表があるので掲載しておく。島原半島という限定された地域の資料であるが、当地の当該期遺跡を理解するうえで格好の資料と思われる。作成者は長崎県教委の宮崎貴夫氏である。

		土器型式	島原半島の主な遺跡	石器類	その他遺物	立地	墳墓
				十石石扁穂小石 字刀 平橋平形砲 形・鋳釘具片柱丁 石石 製形刃状 器棒 石石石片 斧器斧刃 ・石 石 斧 鋤	土壺組紡粉 偶形織垂痕 土痕車付 器土 着 器土 器	海低山 浜台麓 部地地	土幼支 墳小石 墓児墓 壙棺
後後 半半 期期	黒I 色研	西平式 三万田式 御領式	筏 筏・小原下 筏・中田	● ● ○ ○ ● ○ ● ● ● ○ ● ●	● ○ ● ○ ○	+ ● ○ ● + ●	++ ○ ● ○ ●
晩前 半半 期期	磨 期II	(大石式) (黒川式) +	筏・百花台・国崎 畑中・礫石原・国崎 礫石原	○ ● ● ○ ● ● ● ● ● ○	● ● ● ●	○ ○ ● ○ ○ ● ○ ●	○ ● + ● + ●
晩後 半半 期期	突I 帯II 期III	夜白I式 夜白IIa式 夜白IIb式	山ノ寺・朝日山 原山・西鬼塚 原山C・山ノ内	● ● ● ○ ○ ● ○ ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	+ ● + ● ○ ●	++ + ● ● + + ●

第14図 島原半島における縄文後期後半～晩期の様相

註2 福田一志は縄文後期初頭から（Ⅰ期：南福寺・坂の下式段階）から、中葉（Ⅱ期：鐘崎・北久根山式段階）までは、壱岐・対馬・五島などの島嶼部や西彼杵半島や長崎半島の五島灘沿岸部に遺跡が多く形成され、外洋性漁労文化を基盤としたネットワークが背景にあったことを指摘した。それが次の後期後半になると西平式段階を過渡期として、従来のネットワークの一部が崩壊したことにより、遺跡の拡散および減少が生じたとする。さらに三万田式・御領式段階になると、島原半島を中心に遺跡の規模が大きく、丘陵上に展開するようになり、漁労に加えて原初的な農耕が付加された新たな社会文化の形成をとげた。

このように西平式段階を過渡期として遺跡分布が変化する原因のひとつとして海水面の変動（具体的には縄文後期海進）をあげている（福田1999）。

註3 森は1次の調査には参加しておらず、2次調査に参加した（古田1973）。

註4 たとえば唐津市菜畑遺跡の調査者である中島直幸は「この土器を見る限り、菜畑9-12層の土器にほぼ相当する」と考え、さらに「この中には私の分類でA・B・H・K・L・M・Oの各土器が含まれていた」といっている（中島・田島1982）。一方で中島は、「（菜畑）9-12層出土土器を山ノ寺式土器としたが、山ノ寺遺跡B地点出土土器とすべての面で一致する訳ではない。例えば深鉢A、B、浅鉢K、甕L・Mについては共通するが浅鉢I、壺N・Oは山ノ寺遺跡にはなく、その他の器種についても不明な点が多い」とも書いている（中島1982）。

同じく山の寺遺跡B地点の土器を実見した藤尾慎一郎は、「（B地点の土器は）未報告のため詳細は明らかでないが、山ノ寺遺跡B地点の土器を実見した際の観察によれば、II1・III A1・III A2とIII C1・III C2・III D1が含まれている。中心となるのは、III A1とIII C1である。さらにこのような傾向は山ノ寺梶木遺跡[百人委員会1973]でも追認している」と書いている（藤尾1990）。

註5 そのためには、現在長崎県立美術館に所蔵されている山の寺遺跡出土の古田正隆氏採集資料や、山の寺A地点出土土器を実測し、公表するなどの作業が急務と思われる。

註6 中島の「山の寺式（菜畑9-12層出土土器）」と山崎の「夜白I式」、それに「山の寺B地点出土土器」の位置付けについては簡潔に学史としての結論のみを記述しておく。

菜畑遺跡を調査した中島は、菜畑9-12層の土器が、山崎がいう「夜白I」式より古相の特徴をもつことから、菜畑9-12層

の土器群が山崎の「夜臼Ⅰ式」に先行するとした。さらに、菜畑9-12層の土器と山の寺B地点土器の共通性から菜畑9-12層の土器を「山の寺式」と命名した。森貞次郎は菜畑9-12層の土器群が古相を呈することは認めながら、浅鉢には相違がないことから、菜畑9-12層の土器も山崎の言う夜臼Ⅰ式の範疇でとらえようとした。藤尾も同様の立場にたつ。

橋口達也は菜畑9-12層を古相と新相に分けて、曲り田(古)式を菜畑9-12層の古い土器に併行させて、夜臼Ⅰに先行するとしているので、中島と同じ立場にたっている。

要は菜畑9-12層出土土器は山崎のいう夜臼Ⅰ式より古いのか、あるいは併行するのかということになる。さらに中島が、菜畑9-12層の土器を山の寺遺跡B地点出土土器と同じであると認めて「山の寺式」と命名したことにより、今度は「山の寺遺跡B地点出土土器」が山崎のいう夜臼Ⅰ式より古いのか、併行するのかという議論にもなって、複雑な状況を呈している。

註7 原山遺跡出土の板付式土器について森は板付Ⅰ式としているが、小田富士雄は「板付Ⅱ式」とみているようである(大塚1973)。このことは宮崎貴夫氏より教示を受けた(宮崎1974)。

註8 本県でこれまで弥生前期土器について検討した仕事を列記しておく。宮崎貴夫は、宇久・松原遺跡の墳墓出土資料を使って編年をおこなった(宮崎1983)。萩原博文は、平戸市津吉遺跡の状況から、当該期の土器の特徴を提示した(萩原1986)。久村貞男は、四反田遺跡出土の土器を用いて、県北地域の板付式土器の出現の様子を明らかにした(久村1994)。五島列島では塚原博氏が笛吹遺跡の埋葬用土器群の編年をおこなった(塚原1997)。しかし、これらの地域は、幸いにも板付式土器が一定量出土する地域である。型式分類や編年が進んでいる板付式土器を援用することにより、在地土器の様相も把握しやすい。先述したように、島原半島や諫早市、大村市地域では、当該期の遺跡が少ないうえに、板付式土器の出土が希薄なため、前期土器の研究があまり進まないのが現状である。

註9 これまで最古の弥生土器の地位を保ってきた板付Ⅰ式土器は、北部九州における弥生早期の設定とともに、山崎の「夜臼Ⅰ式」や橋口の「曲り田(古)式」などにその座を奪われてしまった観がある。しかも現在、板付Ⅰ式土器はきわめて限定的に使用されている。山崎純男は「板付Ⅰ式土器の分布は北部九州、とくに福岡・早良平野に限られ、周辺地域には客体的な存在を示す」といわれる(山崎1996)。山崎は「板付Ⅰ式土器の存続(使用)期間は約30年前後」とみており(山崎1986)、福岡平野や早良平野に限られるという出土状況はその型式としての時間幅の反映ともいえる。

これまで本県で板付Ⅰ式土器ないし板付Ⅰ式的な土器とされた資料には、対馬・峰町吉田遺跡出土土器、同じく井手遺跡出土土器、五島・宇久町宇久松原遺跡の1950年(昭和25)発見の小形壺(小田1970)、同遺跡第1号石棺内副葬小形壺(小田1970)、同遺跡5号甕棺内出土小形壺(宮崎編1983)、五島・若松町滝河原遺跡で1967(昭和42)に発見された小形壺(宮崎1996)などがある。

註10 対馬・杵岐および長崎市周辺は資料的制約から、本稿ではとりあげなかった。対馬の前期Ⅰ期の土器としては、峰町吉田遺跡同町井手遺跡で出土している板付系土器がある。いずれも壺形土器、甕形土器など、日常使用される形式の組み合わせからなる。吉田遺跡の貝層から出土した土器は、刻目突帯文系の壺や甕が多いが、板付系甕も含まれており、対馬でも最古の板付系土器の一群と考えられる。

一方、井手遺跡出土土器は、『対馬』で公表されている図面を見る限り、刻目突帯文系の壺や甕は含まれていない。甕形土器は無沈線の資料であるが、胴部に張りがある点や、口縁部の刻目が口縁端下半に施されるなど、板付Ⅰ式甕より新しい要素もみられる。1990年(平成2)の再調査では第7・8層から刻目突帯文系土器・板付系土器・朝鮮無文土器が出土しているが、板付Ⅰ式的な土器は発見されていない。最下層から出土した土器も板付Ⅱa式土器であったという(下条1976)。

一方、杵岐地域では、前期Ⅰ期の資料が極めて少ない。公表されているのは、前期Ⅱ期の原の辻遺跡の板付Ⅱb式期のもののみである。

長崎市や西彼半島、野母半島を中心にする地域にも前期の良好な遺跡が存在する。長崎市深堀遺跡、西彼杵郡外海町の出津(しつ)遺跡などであるが、報告が十分ではなく詳細が不明である。わずかな報告からの推定であるが、県央・島原地域よりも、五島地域の土器様式に近いのではないと思われる。両地域の類似性は縄文時代前期から続く傾向である。

註11 藤尾真一郎によって折衷系統と命名されたものである(藤尾1984)。橋口達也は夜臼系土器と呼ぶ(橋口1985)。

註12 近年、福岡平野を中心として出土する板付系弥生土器にたいして、周縁地域に分布する刻目突帯文系弥生土器の研究が大きく進展した。西健一郎や藤尾慎一郎はその研究の牽引者である。西は刻目突帯文土器が弥生時代前期にも主体となる肥後地方において、昭和50年代の後半より精力的に研究を進め、肥後地方の縄文晩期終末から弥生時代前期の土器編年を示した(西1982)。

藤尾はこれまで亀ノ甲タイプの甕として認識されていた刻目突帯文系弥生土器を再検討し、亀ノ甲Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式を設定して、それぞれ板付Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc式に対応するとした(藤尾1984b・1990)。

註13 報告書では、第11区から第16区より出土した弥生土器の一部を「壺」と報告しているが(報文の第40図81~86)、これらの土器は口縁部を肥厚させて刻目を施す甕である。

また、調査区は大きく4つの調査区からなるが、各調査区の土層の記載に統一性がなく、調査区ごとにばらばらであったり、土器がどの土層から出土したのか報告がなかったりと不十分な内容となっている。湧水のため分層できなかったことは理解できるが、分層できなければ土器の型式ごとの出現率や、刻目突帯文土器と板付系土器の構成比などを提示するなど、最低限のデータはだしてほしい。

土器の分類もおこなわれているが、これも各調査区ごとにばらばらで、統一されていない。

註14 県央・島原地域のなかでも、島原地域は前期の遺跡がきわめて少ない。宮崎貴夫は「(島原半島における遺跡の)規模の縮小化と遺跡数の落ち込みは(前期には)ピークにきて」いるとみている(宮崎1997)。宮崎は遺跡数の減少について、島原地域での水稲耕作への転換が順調に進まなかったのが原因ではないかと推定している。

【引用・参考文献】

- 安楽勉編1992『里田原遺跡－町道里田原西線改良工事に伴う調査－』田平町文化調査報告書第5集 長崎県田平町教育委員会
- 稲富裕和編1980『黒丸遺跡』大村市・黒丸遺跡調査会
- 大塚初重編1973『シンポジウム弥生時代の考古学』学生社
- 小田富士雄1970「五島列島の弥生文化－総説篇－」『長崎大学人類学考古学研究報告』第2号
- 小田富士雄・佐田茂・橋口達也・高倉洋彰・真野和夫・藤口健二・武末純編1974『対馬－浅茅湾とその周辺の考古学調査－』長崎県文化財調査報告書第17集 長崎県教育委員会
- 乙益重隆1965『九州西北部』『日本の考古学』Ⅱ河出書房新社
- 川瀬雄一編1994『小野宗方遺跡－市道宗方線交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告書』諫早市文化財調査報告書第13集 諫早市
- 清田純一1998「縄文後・晩期土器考－中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について－」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 下条信行1996『井手遺跡』『原始古代の長崎県』資料編Ⅰ 長崎県教育委員会
- 高野晋司編1993『中江遺跡・上田井原遺跡』長崎県高来町文化財調査報告書第1集 長崎県高来町教育委員会
- 田崎博之1986「弥生土器の起源」『論争・学説日本の考古学』雄山閣
- 田崎博之1994「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会
- 田崎博之2000「壺形土器の伝播と受容」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 田中良之1985「長崎県山の寺遺跡」『探訪縄文の遺跡』西日本編 有斐閣選書R
- 田中良之1987「縄紋土器と弥生土器」『弥生文化の研究』雄山閣
- 塚原博編1997『笛吹遺跡』小値賀町文化財調査報告書第12集 長崎県小値賀町教育委員会
- 中島直幸・田島龍太編1982『菜畑－佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査』唐津市教育委員会
- 中島直幸1982「初期稲作期の凸帯文土器－唐津市菜畑遺跡の土器編年を中心に－」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上巻
- 西健一郎1982「斎藤山遺跡出土刻目突帯文土器の再検討」『九州文化史研究所紀要』第27号 九州大学九州文化史研究施設
- 西健一郎1983「下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討（一）」『九州文化史研究所紀要』第28号 九州大学九州文化史研究施設
- 西健一郎1985「下江津湖湖底遺跡出土刻目突帯文土器の検討（二）」『九州文化史研究所紀要』第30号 九州大学九州文化史研究施設
- 萩原博文1986『津古遺跡群発掘調査報告書』平戸市教育委員会
- 橋口達也1985「日本における稲作の開始と発展」『石崎曲り田遺跡』Ⅲ 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集
- 久村貞男編1994『四反田遺跡』佐世保市教育委員会
- 日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会1960「島原半島（原山・山ノ寺・礫石原）および唐津市（女山）の考古学的調査」『九州考古学』10九州考古学会
- 福田一志1999「西北九州における縄文後期遺跡の特性－土器分布・石器を中心として－」『西海考古』創刊号 西海考古同人会
- 藤尾慎一郎1984a「2. 弥生時代」『諸岡遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集
- 藤尾慎一郎1984b「弥生時代前期の刻目突帯文系土器－亀ノ甲タイプの再検討－」『九州考古学』第59号
- 藤尾慎一郎1990「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集 国立歴史民俗博物館
- 古門雅高編1995『国崎遺跡Ⅱ』南串山町文化財調査報告書第3集 長崎県南串山町教育委員会
- 古田正隆編1973『山の寺梶木遺跡』百人委員会埋蔵文化財報告第1集 百人委員会
- 町田利幸編1996『黒丸遺跡Ⅰ－都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書－』長崎県文化財調査報告書第127集
- 宮崎貴夫1974「弥生時代文化成立過程の研究序説－とくに九州地方を中心として－」未発表
- 宮崎貴夫1983「宇久松原遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ』長崎県文化財調査報告書 第66集 長崎県教育委員会
- 宮崎貴夫1997「原始古代の島原半島」『原始・古代の長崎県』資料編Ⅱ 長崎県教育委員会
- 森貞次郎1962「原山遺跡」『九州考古学』14九州考古学会
- 森貞次郎1963「長崎県南高来郡山ノ寺遺跡」『日本考古学年報』
- 森貞次郎1982「縄文晩期および弥生初期の諸問題」『末盧国』
- 山崎純男1980「弥生文化成立期における土器の編年的研究－板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合－」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
- 山崎純男1986「層位学的方法」『季刊考古学』第17号 雄山閣
- 山崎純男1996「板付Ⅰ式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 山崎純男・島津義昭1981「九州の土器」『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣
- 弥生土器研究会編1984『弥生土器研究会－長崎県の弥生時代初頭前後の土器の検討－』